

〔第26回 学術集会シンポジウムI〕

## 「事例研究」現場発！ 家族看護学の実践知

東京大学大学院医学系研究科

(座長) 野口麻衣子 山本 則子

### 1. 趣旨

日本家族看護学会では、「家族看護学研究」に2010年から「事例研究」という論文の分類を設けている。家族看護学の発展をめざす日本家族看護学会は、「事例研究」分類の創設後10年目を迎え、今後の発展に向けて何をなすべきだろうか。このシンポジウムでは、これまでに事例研究の掲載に至った著者の方々や編集委員長とともに、事例研究論文執筆・掲載の実際の経験を踏まえ、現段階における研究上の課題と、今後の発展のための対処策について検討していくために、4名の方にご登壇いただいた。

### 2. シンポジストからの報告

まず、「家族看護学研究」編集委員長の立場から泊祐子先生に「家族看護学研究」が求める事例研究とは何か、についてご講演いただいた。また、事例研究の実施上の問題として、倫理的配慮（倫理審査も含む）についても問題提起がなされた。

次に、「家族看護学研究」に事例研究が掲載された著者3名に、事例研究の経験及び研究上の課題を共有いただいた。藤原真弓氏（淀川キリスト教病院 家族支援専門看護師）は、延命治療に対する家族の代理意思決定支援について事例研究を行った。研究上の課題として、分析の困難さやスーパーバイザーの必要性について述べられた。また、結果の執筆にあたり、実践を文章化すると、現場の躍動感や鮮やかさが失われてしまいやすく、状況をありのままに伝える難しさを述べていた。事例研究を通して、無意識に行った自分自身の実践が患者にもたらした効果を実感することができたと報告された。

次に、生命の危機にある新生児の治療選択に関する両親の意思決定を支える看護支援についての論文の著者である鈴木征吾氏（東京医科大学）にご登壇いただいた。事例の検討会を複数回行い、その後も複数人の研究者で討議を重ねながら、事例研究としてまとめ上げたことが報告された。事例研究は、個人の経験を多くの看護職と共有できる喜びがあると述べられた。

最後の登壇者である吉田滋子氏（東京大学医学系研究科）は、医療的ケアが必要になった重症心身障害児の在宅復帰を可能にした看護についての事例研究の共著者である。事例研究方法のやりがいは「卓越したケア」のコツを見える化できることであることが報告された。事例研究の課題として、実践者自身には意識化されていない実践の詳細を取り出すことや、学術論文として求められる普遍性・新規性をどのように主張していくか、が報告された。また、現場を生き生きと描写するための方法の一つとして、メタファーを用いた表現の活用についても提言された。

### 3. 討議

シンポジストの講演の後、フロアとの討議の時間を持った。討議では、実践を文章で伝えるためのさらなる検討が必要であることが共有された。また、家族看護学会として事例研究のサポート体制の在り方や、「家族看護学研究」誌面上で読者からの声を取り入れる方法等の提案も行われた。今後、家族看護学の発展のために、事例研究論文の更なる蓄積が求められよう。